

# シンガポール独立50周年

texted by 滋賀銀行 シンガポール研修生 山崎 早

2015年8月9日に独立50周年を迎えるシンガポール。人口約540万人、面積約716km<sup>2</sup>の国がわずか50年の間に目覚ましい発展を遂げ、一人当たりGDP5万6千米ドル(約690万円)のアジア随一の先進国となった。シンガポールの発展の軌跡をたどるとともに、急成長した秘訣を探る。



シンガポール国立博物館ではリー・クアンユー追悼展が開催された

## 建国の父リー・クアンユーの死

「リー・クアンユー！」「リー・クアンユー！」大雨の中、10万人を超える人が集まりシンガポール建国の父に最後の別れを告げた。2015年3月23日シンガポール初代首相のリー・クアンユー氏が91歳で逝去。ほとんど雨が降らない3月のシンガポールに激しい雷雨があり、「天が泣いている」と言われるほど国全体が深い悲しみに包まれた。

老若男女、民族を問わず多くの国民が弔問し、その数は4日間で45万人に上った。連日、弔問には長蛇の列ができたが、人々は「この数時間などリー氏の50年以上にわたる努力に比べれば微々たるものだ」と最長10時間にも及んだ



弔問に訪れる人々の列は毎日深夜まで続いた

待ち時間をものともせず、その多くが棺を前に涙を流した。また各地の記帳所には120万人が訪れた。リー氏がいかに多くの人から尊敬されていたかがよく分かる光景であった。

## 苦悶の独立宣言

マレーシアからの独立当時は人口わずか200万人弱、一人当たりGDP500米ドルだった国が、アジア屈指の先進国として経済発展を成し遂げたのはひとえにリー氏の功績といえよう。

英国植民地時代のシンガポールに生まれ、第二次世界大戦中の青年期は日本の占領下で過ごした。こうした経験が「シンガポールが自らの運命を切り開くためには独立しなければならない」とい

う強い思いを抱かせ、リー氏を政治の世界に導いた。シンガポールが英連邦自治州となった後の1959年、35歳の若さで初代首相に選出された。

リー氏は「国土も小さく資源もないシンガポールが独立するためにはマレーシアとの合併しか道はない」と考え、63年にマレーシア連邦に加盟、「シンガポール州」となり住民の生活安定を図ろうとした。しかし、「マレー人優遇策」をとるマレーシア政府と、マレー系住民と中国系住民との平等策を進めようとするシンガポール政府との意見が対立。65年、マレーシア側から追放されるような形でシンガポールは独立することとなった。独立宣言の演説中、苦悶のあまり、リー氏が涙を流したことはシンガポール人の心に深く刻まれている。



街のいたるところで独立50周年を祝う飾り付けがされている

## 急成長を遂げた50年

1959年の首相就任以降、リー氏は90年まで31年間首相を務めた。「資源のない国が発展するためには『知性』と『産業』と『強い意思』しかない」と考え、徹底した能力主義による教育政策を実施するとともに英語と母国語の「2言語主義」を導入。また、空港・港湾・道路・通信などの近代化に必要なインフラを整備するとともに、税制優遇措置や安価な労働力の提供等で投資環境を整えて外国資本を誘致、工業化を推進した。

これらの政策のもと、国民の雇用を増加させるとともに、HDB住宅(公団住宅)を供給し、国民の生活を安定させた。一方で経済発展のために国民の言論の自由や政治参加を大きく制限したため「独裁」「専制」との批判が相次いだ。しかし、リー氏は「世論を気にしては何もできない。国民のために正しいと信じたことを進めていかなければならない」と、時にはやや強引な方法で政策を実施してきた。

その結果、シンガポールは昨年、経済協力開発機構(OECD)の教育ランキング世界第1位、国際金融センター指数

世界第4位、コンテナ取扱量世界第2位となり、国民の持ち家率も約9割にまで成長した。

## 独立50周年を迎え

経済成長が一段落した今、シンガポールは新たな局面にある。小学校4年生終了時から始まる能力別コース編成等の徹底した選抜主義教育で広がる所得格差、外国人の増加による国民の雇用機会の縮小、日本同様の少子高齢化など数々の社会問題に直面している。IT技術が進化し、国境を越えて多くの情報が瞬時に行き来するようになったいま、さらなる民主主義への要求は高まり、かつてのやり方では通用しない。

リー氏は「たとえ墓に埋葬されたとしても、シンガポールの未来が間違った方向に進もうとすれば私は立ち上がるだろう」という言葉を残している。リー氏が育てたシンガポール国民は整備された法や制度を生かし、実効性ある政策を展開、自ら困難に立ち向かうことだろう。偉大な建国の父を失った悲しみを乗り越え、シンガポール独立50周年の節目を機に、新たな一步を踏み出す。

## 中国の大学受験事情

中国では大学受験を1952年に初めて実施。文化大革命時に10年間ほど中断したが、改革開放後の78年から再開した歴史がある。その後、受験生は増加の一途をたどり、今年是中国全土で942万人が受験した。実施日時、試験内容は全国統一だ。

中国人には「一考定終身(1回の試験で人生が決まる)」の考え方が根強く残っている。そのため、国全体が大学受験を重要視し、社会や家庭の環境整備はすべて受験生優先だ。06年に上海市政府は受験勉強期間中に騒音の出る建築施工および夜間工事を禁止する法律を公布、試験会場から100m以内の工事もすべて禁止したことがあった。

今年の試験は6月7日と8日に実施された。2日目の上海市の天気はあいにくの雨、平日で通勤ラッシュにも重なったため、市は4,000人以上の交通警察官および交通管理者を出動させ、約51,000人の学生が時間通りに試験会場に到着するよう、受験生最優先の交通規制を行った。

このような過熱気味の大学受験は問題も発生している。毎年のように「替考(替え玉受験)」事件が発見されており、今年は江西省で組織的な「替考」事件が発生した。政府は「替考」を厳しく取り締まっており、当事者は刑事責任を問われることもある。また大学進学は農村から逃れる唯一の道であり、地方の学生は必死に勉強する。「只要学不死、就往死里学(勉強して死ぬことはないのだから、死ぬ気で勉強しよう)」が、学生と教師の間のスローガンになっているくらいだ。

安徽省には毎年1万人以上の受験生を送り出し、大学進学率が95%以上(全国平均は約75%)に上る高校もある。まるで軍事訓練場のような道ともいわれ、「受験加工工場」と揶揄されている。一方で、上海や北京など大都市出身の富裕層の学生は中国での受験を放棄し、海外留学を選択する傾向がある。2014年の海外留学生は約46万人にも上った。

学生たちを「一考定終身」から解放するため、中国政府は2000年から試験的に一部の地域で大学受験を春と秋の2回に分けて実施、徐々に全国へ広げた。また、文系・理系の区別なし、試験科目の選択可能など学生の負担を軽減する改革を進めている。

【しがぎんアジア月報】7月号より  
上海駐在員事務所 倪 美華



試験会場の外で受験生を待つ親たち